

礼

ら
い
は

拝

い

令和3年8月30日
5号



諸行無常

変わらないものこそ心のよりどころ

夏休みが終わり、二期が始まりました。この夏休みは「これまでに経験したことがない」という言葉に終始したように感じます。新型コロナウイルスの感染人数が日々新記録を更新し、八月の一ヶ月間に降る雨量をはるかに超える大雨がわずか数日の内に降り続き、多くの地域で浸水被害や土砂災害が発生するなど、当たり前の日常を送ることができない不安な日々が続きました。かつての震災後には、「幸せはひねれば水の 出る暮らし」という句が詠まれたように、何気ない日常でも、それが当たり前のように継続されていくことが幸せであり、そのようなこ

とに気づき感謝の中で暮らしていけることが、本当に幸せなことなのです。

このように、私たちを取り巻く環境は、一瞬たりとも止まらず、常に変化を続けています。この、一時もとどまることなく常に変化を続けていく法則を「無常」と言い、お釈迦さまは、さまざまな説法の中で「諸行無常」をお説きになりました。どのようなこともすべては無常であると智慧をもつて見ることで、つまり、刻々と変化をする一切の現象や、その現象のまわりにある道理を見きわめようとする心の持ち方こそが、安らぎの道であるとお説きになったのです。しかしながら、私たちはお金や物、地位や名誉、人間関係や自分そのものまで、様々なことを常に変わらないものであると思ひ込み、また、いつまでもこのまま変わらないでいて欲しいと願う気持ちを持っています。その心が「執着」へとつながっていくのです。執着の心は「自分さえ良ければ」という自己中心的な考えを生じさせ、さらには他を傷つけてでも、自分の幸せだけを考えてしまうのです。このような気持ちや考えにとらわれたいためには、全てが無常の存在であるという、唯一ゆるぎのない真理を理解することが大切なのです。そして、いかにつらい状況であったとしても、すべてが無常であることを

理解していれば、必ず新たな変化が生じ、好転していくチャンスや可能性があると信じて進んでいくことができるのです。

一般的にウイルスは、感染・増殖をするたびに変化(変異)をしていきます。その変異が、私たちにとって問題のない場合もあるのですが、デルタ株と呼ばれる感染力の強いウイルスの存在は、変異の速さや恐ろしさを肌で感じさせるものであり、私たちに先の見えない不安感を募らせていくのです。しかし、そのウイルス蔓延の状況に立ち向かい、多くの研究者がその性質や特徴を徹底的に調べ、ワクチンの開発へと導きました。まさに道理を見極めようとする強い気持ちや、事態を好転させていったと言えるのではないのでしょうか。また、コロナ禍という状況そのものを無常と考えれば、いつの日か必ず変わっていく、蔓延したものはやがて好転し収束していくのです。コロナ禍の初期にはマスクの買い占めが生じ「自分さえ良ければ」という私たちの心が明らかにになりました。さらに陽性者やその家族、医療関係者などへの差別的な言動が今も続いており、私たちの自己中心的な心の弱さも明らかになりました。今、私たちに必要なことは、諸行無常の道理を正しく理解し、心を静かに整えておくことではないでしょうか。